

2006年3月修士論文（概要）

「定住型児童」の対話と協働学習を通じた「読む力」の育成
—「イメージ化」を取り入れたピア・リーディングの実践をもとに—

藪本容子

第1章 問題の所在

筆者は、早稲田モデルの一環としてA小学校の主に「定住型児童」を対象に日本語国際学級と在籍学級における教育支援を行ってきた。こうした支援や参与観察、在籍学級担任、日本語国際学級担任、対象児童へのインタビューなどを通して、子ども達の4技能（聞く、話す、読む、書く）の言語能力を正確に把握することに努めてきた。また、在籍学級担任と日本語国際学級担任、筆者が協力体制をとりながら多面的な視点で、長期的に児童の実態を把握する学校体制もとられてきた。そこで見えてきた児童の実態として、在籍学級と日本語国際学級での子ども達の様子が大きく異なっていたことがあげられる。特に認知的負担の大きい「読み」の活動を伴った授業は、児童の様子に大きな違いが見られた。

このような現状を踏まえ、「定住型児童」の「読み」を伴う学習におけるつまずきの要因について検討し、さらに「読む力」を育む支援のあり方について、「イメージ化」と「対話と協働学習」の視点から提案を行う。

第2章 「読む」とは

本章では、「読む」とは、どういうことなのか。また、今の子ども達に求められる「読む力」とは、どのようなものなのかについて述べた。さらにこうしたことを踏まえて、実際に「読む力」を育むためには、どのような視点が重要なのかについて認知的負担の視点と、ストラテジーの視点から議論した。以下、筆者が捉えた「定住型児童」に育む「読む力」である。

今の子ども達に必要な「読む力」とは何か。認知心理学の研究分野では、人がどのように読んでいるかという視点に立って長い間研究が行われ、様々な成果が出されてきた。そうした流れの中で、日本語母語児童生徒を対象とした研究で、高橋(1999)は、読みの過程を文字や単語の処理のレベル、文の処理のレベル、談話の処理のレベルの3つに分けて分類した。しかし、ここでの分類は、読者一人が「読む」という行為の分類にとどまっており、実際に子ども達が学んでいる学校生活の中で求められている「読み」の学習から考えるとあまりに狭い。児童が多くの時間を過ごす在籍学級では読

んで理解したことや感じ取ったことを友達と話し合いながら、異なった視点からの「読み」に気づいたり、友達の意見をもとに再度自分の「読み」を振り返るきっかけとなったりする。学校生活の中での読む活動は「読み」を「個人」から「全体」へ、そしてまた「個人」へと常に友達や教師との関わりの中で学んでおり、他者との関係を抜きにしては考えられないのである。

国立教育政策研究所（2004）では、経済協力開発機構（OECD）で行われた国際学力調査「生徒の学習到達度調査」（PISA：Programme for International Student Assessment）の結果が発表されたが、ここで求められている「読む力」も知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるのかが基準となっており、これからの変化の激しい社会で生き抜いていく子ども達にとって必要な力として考えている。こうしたことから、「読む力」を「一人で内容を把握する力」として長い間捉えてきた今までの狭い視点から、もっと子どもの実生活に即した「読む力」へと捉え直す必要があるのではないだろうか。そこで、本稿における「読む力」とは、単に文章の理解といった内容把握を超え、他者との対話と協働学習を通じて自己の課題を解決したり、実生活に生かすための力として「読む力」を定義する。

さらに以上のことを踏まえて、実際に「読む力」を育むためには、認知的負担を小さくする活動の視点と、その一方で、自らが認知的負担のある「読み」の学習の負担を小さくするストラテジーの視点が重要であると考えに至った。そして、その二つの視点を満たす活動として本研究を試みている。

第3章 「イメージ化」を取り入れたピア・リーディングの試み

前章まで検討してきた結果、「認知的負担」の視点と「ストラテジー」の視点が、「定住型児童」の支援には重要なのではないかと判断した。こうした視点に立って、子ども達の支援を行う場合、その二つの視点の前提として、発達の分野から出された、子どもの興味付け、多様な読み物にふれる、既有知識と結びつける、図や絵を活かして読む、教師の理解を促す手立てをとる等を踏まえた上で、支援の方法を検討していかなければならないと考えた。今回、筆者は、このような点をすべて含んだ支援の方法として、「カット・イメージ読解法」とピア・リーディングの方法が、有効なのではないかと考えた。しかし、どちらも大学生や留学生を対象としている活動のため、今回、筆者が二つの方法を活かしつつ、発達の視点も取り入れることにより、現在支援を行っている小学校2年生から3年生の「定住型児童」にあっ

た活動を考案した。

以上の理由から、まずここでは、「イメージ化」を取り入れた先行研究を概観し、次に、「カット・イメージ読解法」とピア・リーディングの先行研究を概観した。さらに、筆者が考えた「読む力」を育むための活動である、「『イメージ化』を取り入れたピア・リーディング」について検討し、提案を行った。

第4章 実践研究：「イメージ化」を取り入れたピア・リーディングの実践

ここでは、まず、実践の概要を述べ、次に実践の内容を紹介し、その分析を行った。

【実践の概要】

対象児童：現在、日本語支援を行っているA小学校の3学年「定住型児童」6名

※使用言語は主に日本語。対象児童は、取り出しでグループ学習を行っており、在籍学級への移行期の児童である。

日本語能力：『J S Lバンドスケール』に基づいて測定を行った結果(2005.2)

児童	聞く	話す	読む	書く	来日時期	家庭使用言語
O	<u>4</u>	<u>4</u>	<u>3</u>	<u>3</u>	日本生まれ	中国語(台湾)・日本語
Y	5	5	5	5	日本生まれ	中国語(台湾)・日本語
R	4~5	4	4	4	小学校入学半年前	タガログ語・日本語
H	5	5	5	4	日本生まれ	タガログ語・日本語
K	5	5	5	5~6	日本生まれ	タガログ語・日本語
N	5	5	5	5	日本生まれ	タイ語・日本語

表1 対象児童の日本語能力

実践方法：①絵本の読み聞かせ(2005年2月~3月 週1回1時間 計4回)

②文章から絵や図をイメージして読む活動(2005年3月~10月 週1回1時間 計12回)

- ・絵本、写真を多く含む説明文、折り紙やぬり絵の本を利用して、文章のみの本を作成。児童は1人または2人で文章を読み、文章からイメージした絵を選択し本に貼る活動。
- ・「読み」の過程や読後に、その絵を選んだ理由を話し合ったり、実際に自分達で作った解説書をもとに折り紙を折ったりしながら、自分のイメージを修正したり膨らませたりすることにより、「読み」を意識化する活動。

今回ここでは、多様な実践の中から、次の実践を紹介し分析を行っている。

【今回取り扱った実践】

- ① 絵本を活用したもの
- ② 紙芝居を活用したもの
- ③ 教科書の説明文を活用したもの
- ④ 折り紙を活用したもの
- ⑤ パズルを活用したもの

【分析の観点】

本稿では、「イメージ化」とピア・リーディングの実践を次の6つの観点で分析を行った。

- ① 興味・関心を育てる
- ② 既有知識と関連付ける
- ③ 他者から知識や背景知識を学ぶ
- ④ 他者からストラテジーを学ぶ
- ⑤ 内省する力を育成する
- ⑥ 他者との関わり、学びあい

また、分析のデータは、日々のフィールドノーツ、指導時の録音データ（すべて文字化）、指導時の録画データ（すべて文字化）、筆者と対象児童、教師との話のメモ、バンドスケールで把握した資料等を活用した。

筆者は、「定住型児童」の「読み」の学習に約一年間関わってきた。6人の多様な「読み」のつまずきをどのように把握し、伸ばしていけばいいのかを常に考えながら実践を行ってきた。そこには、認知的負担を軽減する視点と、認知的負担の多い「読み」の学習にどのようなストラテジーを使って子ども達自身が解決していくのか、その手立てを身につけさせるという視点で実践を行ってきた。

Oに関しては、「イメージ化」の実践を行いながらも常に手探りであった。読み聞かせの実践を行っているときには支援者KUが、本実践を行っているときは、日本語国際学級の先生や支援者Aが筆者と同様に輪の中に入って、特にOを中心に支援を行ってきた。Oに関しては、筆者も実践を行いながら、個別の支援の必要性を感じていた。対話により、「イメージ化」を促すことがOには特に必要であると感じたためである。そのため、6人で行いながら、近くにおいて常に支援を行える体制をとっていた。こうした意味では、今回の「イメージ化」を取り入れたピア・リーディングは、一人ひとりの児童の実態に合わせて支援を

試みることが出来たと考える。今回の筆者が上げた分析の観点も、舘岡(2005)、内田(1999b)、秋田(1998)であげていた重要な観点であったが、その6つの状況が生まれていたことは筆者の研究に意味があったと思われる。

しかし、Oに関しては、今回の学習を通して、「読む」ことに対する抵抗は少なくすることが出来たと考えるが、学年相応の教科書を読むことや、一冊の本をじっくり読むまでには至らなかったと言える。こうした、6人の個別性に配慮した支援をさらに今後も考えていかなければならないと感じている。

また、本実践を行う過程で、筆者が重要であると考えていたストラテジーが、場の設定の仕方により、子ども達の協働の学びにも影響していることが確認された。さらに、そのストラテジーを使う上での個々の学習に対するビリーフも重要な役割を果たしていることがわかった。矢崎(1998)が、J S L児童の「読み」のストラテジーは、学習の全体の意味を把握するトレーニングを行う「トップダウン型」学習と、個々のキーワードの学習を進める「ボトムアップ型」学習の2つの学習を同時に取り入れていく「トップダウン・ボトムアップ融合型」の学習を行うことの必要性を提案しているが、こうした視点と協働の学びという視点をどう結び付けていくかが今後の重要な視点であると考えている。

第5章 「イメージ化」を取り入れた対話と協働学習の意義と可能性

筆者の提案した活動には、次の10の意義と可能性が確認された。

- ① 興味・関心を育てる
- ② スキーマを活性化させる
- ③ 対話や外言を通して知識やストラテジーを学ぶ
- ④ 個々のスキーマの変容をもたらす
- ⑤ 内言と「二次的ことば」の双方向から認知的思考を育む
- ⑥ 過程の可視化と達成感が得られる課題解決型学習
- ⑦ 内省によるメタ認知能力を育む
- ⑧ 言語感覚を育む
- ⑨ 仲間意識から育まれる言語能力
- ⑩ 教師や支援者が的確な支援を行える

しかし一方で、課題も明らかになった。筆者の提案した活動を成立させるためには次の

条件が重要である。第一に、協働で「読み」の学習を行う必然性が感じられる場であること。そこには明確な目標があり、それを達成させたいという意欲がもてる課題であること。第二に、個々の言語能力差や経験差に配慮して活動を考えること。第三に、学習観、ベリーフにもとづくストラテジーが、互いの学びに影響すること。第四に、子ども同士の信頼できる人間関係がそこにあることなどである。筆者は、対話と協働学習を通して、互いの知識やストラテジーを学び合えると考えていたが、そのためには、多くの課題があることが明らかになった。

第6章 まとめと今後の課題

本章では研究のまとめと本研究の問題点、今後の課題について記述した。さらに以上のことを踏まえ、今後の展望を述べた。

今回の「カット・イメージ読解法」と「ピア・リーディング」は、実際にそれぞれの提案者が高校生や留学生と関わる中で試行錯誤をしながら生まれてきた指導法や活動である。そのため、しっかりと地に足が着いているものと言える。今回筆者も同様に、実際の「定住型児童」と触れ合う中で、その問題点を見つけ、どのようにすれば彼らの「読む力」を育むことができるかと、常に考え試行錯誤をしながらたどり着いた活動である。ここでの筆者の提案の特徴は、二人の有効な指導法や活動を取り入れつつ、発達の視点をさらに盛り込んだことだと考える。子ども達の学習は、大人の場合と大きく異なる。そのため、発達の視点をしっかりとおさえ、支援を試みていかなければ、児童にとって有効な学びを生み出せないのである。こうした意味からも筆者の考えた「イメージ化」を取り入れたピア・リーディングの提案は、問題点が可視化されない「定住型児童」の課題、さらには問題点が可視化されない「読み」の学習の課題を取り上げ、それに発達の視点を含めた点で意味があるものと考えている。また、今回の支援の視点は、これまでの年少者日本語教育で行われてきた、リライトや入り込み支援等による、教科書や授業の内容を理解することを目指した、いわゆる目先の「できる」「できない」にとらわれた支援とは大きく異なり、JSL児童の認知的発達を促すことにより、結果として学習に関われるように支援を行っていくとした視点も大きな意味がある。しかし一方で、認知的発達を促す支援は、言語能力が身についているかどうかの過程や結果が見えにくく、また、すぐには結果に表れないため、長い期間をかけた継続した支援が必要となる。こうしたことから、教師や支援者はどうしても成果の表れやすい目先の成長にとらわれた支援になりやすいのである。

これからの年少者日本語教育は、こうした支援の特徴も把握した上で、目の前の個々の児童にとって、どのような言語能力を身につけさせることが、彼らにとって意味のあることなのかを常に問いながら、児童の実態に合わせてカリキュラムや支援を修正したり、目指す方向を修正し、目の前の子どもとともに試行錯誤しながら取り組んでいくことが重要なのである。

<参考文献>

- 秋田喜代美(1990)「文章理解」内田伸子編『新・児童心理学講座6 言語機能の発達』金子書房 pp. 111-147
- 秋田喜代美(1998)「文章の理解過程」内田伸子編『言語発達心理学—読む書く話すの発達—』放送大学教育振興会 pp. 85-95
- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五(1994)「文章理解過程—基本的問題と概括的把握—」『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学』サイエンス社
- 池上摩希子(1994)「『中国帰国生徒』に対する日本語教育の役割と課題—第二言語教育としての日本語教育の視点から—」『日本語教育』83号 pp. 16-28
- 池上摩希子(1996)「読解ストラテジートレーニング・プログラムの評価—学習者の自己評価と教授者の観察を中心に—」『中国帰国者定着促進センター 紀要』第4号
- 池上摩希子(1998)「児童生徒に対する日本語教育の課題・再検討—研究ノート—」、『中国帰国者定着促進センター 紀要』第6号 pp. 131-146
- 池上摩希子(2002)「『読むこと』と日本語指導」縫部義憲編『多文化共生時代の日本語教育 日本語の効果的な教え方・学び方』瀝々社
- 池上摩希子(2005)「年少者の日本語教育と自然習得」『日本語学』3月号 Vol. 24 pp. 76-85
- イーザー, W. (1976[1982])『行為としての読書—美的作用の理論—』(饒田収訳) 岩波現代選書
- 岩立志津夫・小椋たみ子編(2002)『シリーズ臨床発達心理学4 言語発達とその支援』ミネルヴァ書房
- 岩永正史(1996)「認知科学の二つの流れと国語科教育研究」田近洵一編『国語教育の再生と創造—21世紀へ発信する17の提言—』教育出版
- 内田伸子(1982)「文章理解と知識」佐伯胖編『認知心理学講座3 推論と理解』東京大学出版会、pp. 158-179

- 内田伸子(1996)『子どもの発達と教育1 ことばと学び—響きあい、通いあう中で—』金子書房
- 内田伸子(1998)『言語発達心理学—読む書く話すの発達』放送大学教育振興会
- 内田伸子(1999a)『発達心理学 ことばの獲得と教育』岩波書店
- 内田伸子(1999b)「学校の中のコミュニケーション」『日本語学』6月号 Vol. 18, pp. 70-80
- 内田伸子(1999c)『『生きる力』としてのことばをはぐくむ』『日本語学』7月号 Vol. 18 pp. 4-13
- 内田伸子(2004)「子どものコミュニケーション能力の発達とことばのカリキュラム— 一次的ことば～二次的ことば～三次的ことばへ—」秋田喜代美編『子どもたちのコミュニケーションを育てる—対話が生まれる授業作り・学校づくり』教育開発研究所
- ヴィゴツキー, L. S. (1974)『子どもの想像力と創造』(広瀬信雄訳) 新読書社
- ヴィゴツキー, L. S. (1934[2001])『新訳版 思考と言語』(柴田義松訳) 新読書社
- 太田晴雄 (2000)『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 太田晴雄 (2002)「教育達成における日本語と母語—日本語至上主義の批判的検討—」宮島喬他編『国際社会②変容する日本社会と文化』pp. 93-118 東京大学出版会
- 大平浩哉(1998)「読みの指導の改革をめざして—文学教材を中心として—」『日本語学』Vol. 17 pp. 77-85
- 大村彰道監修、秋田喜代美・久野雅樹編(2001)『文章理解の心理学—認知、発達、教育の広がりの中で—』北大路書房
- 岡崎敏雄 (1995)「年少者日本語教育研究の再構成—年少者日本語教育の視点から—」『日本語教育』86号、pp. 1-11
- 岡崎眸(1994)「内容重視の日本語教育—大学の場合—」『東京外国語大学論集』49
- 岡崎眸(2002)「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』pp. 49-66 凡人社
- 岡崎眸・岡崎敏雄(2001)『日本語教育における学習の分析とデザイン—言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社
- 岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波書店
- 岡本夏木 (1985)『ことばと発達』岩波書店
- オックスフォード, R. (1994)『言語学習ストラテジー』(宍戸通庸・伴紀子訳) 凡人社
- 海保博之・柏崎秀子(2002)『日本語教育のための心理学』新曜社

- 川上郁雄 (2002) 「年少者のための日本語教育」 細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 pp. 81-100 凡人社
- 川上郁雄 (2003a) 「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」『早稲田大学日本語教育研究』第2号 pp. 1-16
- 川上郁雄 (2003b) 「年少者日本語学習者の日本語能力測定の方法—J S Lバンドスケールの試み—」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 川上郁雄 (2004) 「年少者日本語教育実践の観点 — 『個別化』『文脈化』『統合化』」『早稲田日本語研究』12、pp. 1-12 早稲田大学日本語学会
- 川上郁雄 (2005a) 「J S Lバンドスケールを使った言語能力の把握—年少者日本語教育の実践として—」『2005年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 川上郁雄 (2005b) 「言語能力観から日本語教育のあり方を考える」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ1—ことば・文化・社会の日本語教育へ—』くろしお出版
- 川上郁雄 (2005c) 「バンドスケール評価—行動から言語能力をどうとらえるか」『2005年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広 (2004) 「年少者日本語教育学の構築へ向けて — 『日本語指導が必要な子どもたち』を問い直す」『2004年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 273-284. 日本語教育学会
- 川崎恵里子 (2005) 「文章理解と記憶のモデル」川崎恵里子編『ことばの実験室—心理言語学へのアプローチ』ブレーン出版
- 岸学 (2004) 『説明文理解の心理学』北大路書房
- 清田淳子 (2001) 「教科としての『国語』と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み」『日本語教育』111号 pp. 76-85
- 国府田晶子 (2004) 「絵本と対話による『読み書き能力』の育成—J S L教育を必要とする定住型児童を対象に—」『早稲田大学日本語教育研究』第5号 pp. 61-75
- 小嶋恵子 (1996) 「テキストからの学習」波多野誼余夫編『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会 pp. 181-202
- 国立教育政策研究所 (2004a) 『生きるための知識と技能2—OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003年調査国際結果報告書—』ぎょうせい
- 国立教育政策研究所 (2004b) 『PISA2003年調査 評価の枠組み OECD生徒の学習到達度調査』ぎょうせい

- 齋藤ひろみ (1998) 「内容重視の日本語教育の試み—小学校中高学年の子どもクラスにおける実践報告—」『中国帰国者定着促進センター紀要』第 6 号、pp. 106-130
- 齋藤ひろみ (1999) 「教科と日本語の統合教育の可能性—内容重視のアプローチを年少者日本語教育へどのように応用するか—」『中国帰国者定着促進センター紀要』第 7 号 pp. 70-92
- 齋藤ひろみ (2000) 「帰国児童・生徒クラスの『日本語と教科の統合学習』における教室会話の分析」『中国帰国者定着促進センター紀要』第 8 号 pp. 99-123
- 齋藤ひろみ他 (2000) 「子どもクラス授業実践記録—内容重視のアプローチによる『日本語と教科の統合学習』の例—」『中国帰国者定着促進センター紀要』第 8 号 pp. 124-144
- 齋藤ひろみ (2001) 「『学習』を支える日本語能力の育成に向けて」『世界をひらく教育』Vol. 23 pp. 60-77 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会
- 齋藤ひろみ (2002) 「学校教育における日本語学習支援」『日本語学』Vol. 21 pp. 23-35
- 齋藤恵 (2004) 「年少者 JSL 教育におけるスキヤフオールディングの必要性」『年少者日本語教育実践研究』No. 2 pp. 37-45.
- 齋藤恵 (2005) 『年少者 JSL 教育による児童生徒の統合的適応支援の可能性—日本語指導におけるスキヤフオールディングの試み—』、早稲田大学 2005 年度修士論文
- 佐伯胖 (1995) 『「学ぶ」ということの意味』岩波書店
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』
- 佐藤公治 (1991) 「意味の発生の場としての対人的相互作用」『北海道大学教育学部紀要』55 号 pp. 81-94
- 佐藤公治 (1996) 『認知心理学からみた読みの世界—対話と協同的学習をめざして—』北大路書房
- 佐藤公治 (1999) 『認知と文化 10 対話の中の学びと成長』金子書房
- 佐藤郡衛 (2001) 『国際理解教育 多文化共生の学校づくり』明石書店.
- 佐藤学 (1995) 「学びの対話的实践へ」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い』東京大学出版会, pp. 49-91
- 庄井良信・中嶋博編 (2005) 『未来への学力と日本の教育 3—フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店
- 庄井良信 (2005) 「コラボレーションの発達援助学—高い学力は『安心と共同』の学びから—」庄井良信・中嶋博編『未来への学力と日本の教育 3—フィンランドに学ぶ教育と

- 学力』明石書店
- 高橋登(1999)『子どもの読み能力の獲得過程』風間書房
- 高橋登(2001)「学童期における読解能力の発達過程－1－5年生の縦断的な分析－」『教育心理学研究』49号
- 武田常夫(1973)『イメージを育てる文学の授業』国土社
- 田島信元(2003)『共同行為としての学習・発達－社会文化的アプローチの視座』金子書房
- 館岡洋子(2001)「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111号
pp. 66-75
- 館岡洋子(2004)「対話的協働学習の可能性－ピア・リーディングの実践からの検討－」『東海大学紀要留学生教育センター』第24号, 東海大学留学生教育センター, pp. 37-46
- 館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ－日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会
- 田中敏(1983)「幼児の物語理解を促進する効果的自己言語化の喚起」『教育心理学研究』第31巻 第1号 pp. 1-9
- 田中孝彦(2005)「教師教育の改革と教師像－2003年の調査と研究交流から－」庄井良信・中嶋博編『未来への学力と日本の教育3－フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店
- 谷口篤(2001)「文章理解－私たちはどのように文章全体の意味を理解しているのか－」森敏昭編『おもしろ言語のラボラトリー』北大路書房
- 谷口すみ子(1991)「思考過程を出し合う授業－学習者ストラテジーの観察－」『日本語教育』75号 pp. 37-50
- 中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法－12歳までに親と教師ができること－』アルク
- 中島誠・岡本夏木・村井潤一(1999)『シリーズ人間の発達7 ことばと認知の発達』東京大学出版会
- 西郡仁朗・鈴木美加(1992)「日本語の読解過程におけるトップ・ダウン処理に関する実証的研究－実験とプロトコールによる検討」『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 西原鈴子(1996)「外国人児童生徒のための日本語教育のあり方」『日本語学』Vol. 15,
pp. 67-74
- 縫部義憲(1999)『入国児童のための日本語教育』スリーエーネットワーク
- ネウストプニー、J. V. (1999)「言語学習と学習ストラテジー」、宮崎里司・ネウストプニー、J. V. 編、『日本語教育と日本語学習：学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版

pp. 3-22

年少者日本語教育研究室(2004)『J S Lバンドスケール 2004 試行版・小学校編』早稲田大学大学院 日本語教育研究科年少者日本語教育研究室

波多野誼余夫・稲垣佳世子(2000)「共同理解活動への社会発生的アプローチ」植田一博・岡田猛編『協同の知を探る－創造的コラボレーションの認知科学－』共立出版, pp. 46-48

東川祥子(2003)『日本語指導の必要な「定住型児童」に対する日本語教育－書く力から学習言語の育成を考える－』早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文

深川明子(1987)『イメージを育てる読み(授業への挑戦18)』明治図書

深谷昌弘・田中茂範(1994)「合意学の構図」『カオスの時代の合意学』合意形成研究会

府川源一郎(1998)『「読むこと」の教育の改革へ』『日本語学』Vol.17 pp. 86-93

福山文子(2003)「教室内の多文化化を活用した国際理解教育－第二言語話者と第一言語話者、その双方の育ちを目指して－」『国際理解教育』9号

藤井知弘(1998)「読みの交流における対話の実相」『読書科学』第42巻 第2号, 日本読書学会, pp. 73-81

細川英雄(1997)「日本語教育の観点から見た「国語」」『語文』第98号

細川英雄(1999)「日本語教育と国語教育－母語・第2言語の連携と課題－」『日本語教育』100号

細川英雄(2001)「新しい「国語表現」の可能性－コミュニケーション能力育成としての問題発見解決学習－」『早稲田大学国語教育研究』第21集

細川英雄(2002)『日本語教育は何をめざすか－言語文化活動の理論と実践』明石書店

細川英雄(2003)『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語教育研究センター「総合」研究会

細川英雄(2004)『考えるための日本語－問題を発見・解決する総合活動型日本語教育のすすめ－』明石書店

三宅なほみ(1985)「理解におけるインターアクションとは何か」佐伯胖編『認知科学選書4 理解とは何か』東京大学出版会, pp. 69-98

三宅なほみ(2000)「建設的相互作用を引き起こすために」植田一博・岡田猛編『協同の知を探る』共立出版, pp. 40-45

宮崎里司(2004a)「正統的周辺参加論からみた外国人力士の日本語習得過程」『2004年度

- 日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp. 179-184.
- 宮崎里司 (2004b) 「座標軸を問い直す日本語教育への提言」(新時代の日本語教育をめざして—早稲田大学大学院日本語教育科の取り組み・第1回)『日本語学』5月号 Vol. 23 pp. 84-93.
- 宮島喬(1999)『文化と不平等』有斐閣
- 無藤隆(1998)「言葉の学びの根幹から国語教育をとらえ直す」『日本語学』Vol. 17 pp. 19-26
- 文部省(1999)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2003)『小学校学習指導要領』国立印刷局
- 文部科学省(2002)『学校教育における JSL カリキュラムの開発について(中間報告)』文部科学省初等中等教育局国際教育課
- 文部科学省(2003)『学校教育における JSL カリキュラムの開発について(最終報告)』文部科学省初等中等教育局国際教育課
- 矢崎満夫 (1998) 「外国人児童に対する教科学習支援のための日本語教育のあり方—算数文章題におけるストラテジー運用の考察から—」『日本語教育』、第 99 号 pp. 84-95
- 矢崎満夫 (2004) 「外国人児童と日本人児童とのインターアクションのための日本語支援—教室内ネットワーク形成をめざしたソーシャルスキル学習の試み」、『日本語教育』、120 号 pp. 103-112
- 藪本容子 (2004) 「公立学校における J S L 児童への支援のあり方を考える」川上郁雄編『年少者日本語教育実践研究』No. 3 早稲田大学大学院日本語教育研究科 年少者日本語教育研究室
- 藪本容子 (2005a) 「定住型児童の『読み能力』育成をめざして—『イメージ化』を取り入れた実践授業から見えてくること—」『早稲田大学日本語教育実践研究』No. 2 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 藪本容子 (2005b) 「『定住型児童』の対話と協働学習を通じた『読む力』の育成—『イメージ化』を取り入れたピア・リーディングの実践をもとに」国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」実行委員会編『国際研究集会 ことば・文化・社会の言語教育』pp. 291-298
- 藪本容子 (2006) 「『定住型児童』の『読む力』を育む対話と協働学習の可能性と課題—『イメージ化』を取り入れたピア・リーディングの実践をもとに—」『第 4 回研究集会予稿集』年少者日本語教育学を考える会

- 山崎茂雄 (1998) 「カット・イメージ読解法の研究(1)－静止画的なイメージで本文を分ける課題の小説文理解促進効果－」『日本教育心理学会第40回総会発表論文集』日本教育心理学会
- 山崎茂雄 (2001) 『カット・イメージ読解法』の概要とその効果『読書科学』第45巻 第3号
- 善元幸夫(2004) 「外国人児童にとって最善の授業とは」『児童心理』12月号 金子書房
- 善元幸夫(2006) 「日本語で学ぶ世界－ニューカマーの子どもたちのアイデンティティー」『ことばの教育と学力』明石書店
- 林逸菁 (2005) 「総合活動型のインターアクションにおける学び－レベルギャップのある日本語学習者の調整行動と意識の考察を通して」国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」実行委員会編『国際研究集会 ことば・文化・社会の言語教育』pp. 291-298
- Alderson, J. C. (1984) Reading in a foreign language: a reading problem or a language problem? In J. C. Alderson and A. H. Urquhart (eds.) *Reading in a Foreign Language*.
- Block, E. (1986) The Comprehension strategies of second language readers. *TESOL Quarterly*. Vol. 20. N. 3 463-494.
- Bransford, J. D. & Johnson, M. K. (1972) Contextual prerequisites for understanding: some investigations of comprehension and recall. *Journal of Verbal Learning and Behavior*, 11, 717-726.
- Cummins, J. and Swain, M. (1986) *Bilingualism in Education*, Longman.
- Elley, W., and F. Mangubhai. (1983) The impact of reading on second language learning. *Reading Research Quarterly* Vol. 19, pp. 53-67.
- Kintsch, W. (1994) Text comprehension, memory, and learning. *American Psychologist*, 49, pp. 294-303.
- Morrow, L., and C. Weinstein. (1986) Encouraging voluntary reading: The impact of a literature program on children's use of library centers. *Reading Research Quarterly* Vol. 21, pp. 330-346.
- Palncsar, A. S. and Brown, A. L. (1984) Reciprocal teaching of comprehension fostering and comprehension monitoring. *Cognition and Instruction*. 12. 117-175.
- Skutnabb-Kangas, T. (1981) Bilingualism or Not: The Education of Minorities, *Multilingual Matters*.

- Spilish, G. J., Vesonder, G. T., Chiesi, H. L. & Voss, J. F. (1979) Text processing of domain-related information for individuals with high and low knowledge. *Journal of Verbal Learning and Behavior*, 18, 275-290
- Van Dijk, T. A. & Kintsch, W. (1983) *Strategies of discourse comprehension*. New York: Academic Press.

<実践に使用した教材>

- 光村図書出版株式会社 (2002) 『小学校国語学習指導書二年 (下) 赤とんぼ』 光村図書出版株式会社
- 光村図書出版株式会社 (2002) 『こくご 二年 (下) 赤とんぼ』 光村図書出版株式会社
- 山下明生 (1984) 『ねずみのいもほり』 ひさかたチャイルド
- 山下明生 (1983) 『ねずみのかいすいよく』 ひさかたチャイルド
- 山下明生 (1986) 『ねずみのさかなつり』 ひさかたチャイルド
- 宮西達也 (2003) 『おまえうまそうだな』 ポプラ社
- 宮沢賢治 (1996) 『どんぐりとやまねこ』 童心社
- 杉浦宏 (2005) 「めだか」 『ひろがる言葉 小学国語3上』 教育出版
- やぎまよしこ (2005) 「すみれとあり」 『ひろがることば 小学国語2上』 教育出版
- 小林一夫監修 (1997) 『改訂新版 かならず折れるおりがみ①』 ひかりのくに
- エリック・カール (1992) 『ごちゃまぜカメレオン』 偕成社
- エリック・カール (1991) 『ぬりえ絵本 ごちゃまぜカメレオン』 偕成社